

# ベネズエラの危機を 2019 年 12 月時点でどう見るか

山崎圭一(横浜国立大学国際社会科学研究院)

2019 年 12 月 12 日(木曜日) 15:00~18:00 @ 日本ジャーナリスト会議・事務室

Eメール(大学、新): [yamazaki-keiichi-zg@ynu.ac.jp](mailto:yamazaki-keiichi-zg@ynu.ac.jp)

この報告は、以下の 2 つの報告を統合して、再編成した論考である(新規加筆部分あり)。

- ① 京都外国語大学ラテンアメリカ研究所主催第19回ラテンアメリカ研究講座「ベネズエラを巡る：21世紀ラテンアメリカの政治・社会状況」での第3報告「ベネズエラ危機の主因をめぐる国際的評価の変化—米国経済封鎖主因論の登場—」。開催日時は、2019年11月8日(金曜日) 17:10~17:50。
- ②ラテン・アメリカ政経学会第56回全国大会(於:獨協大学)でのシンポジウム「岐路に立つラテン・アメリカの民主主義」での第4報告「米国トランプ政権のモンロー・ドクトリンの影響をどうみるか—ブラジルおよび中米の情勢についての疑問点の整理—」。開催日時は、2019年11月17日(日曜日)13:40~16:40。

## 目 次

### 1 はじめに:現在のベネズエラは一般的にどう描かれているか

### 2 「モンロー・ドクトリン」について

- 2-1 民主主義の世界的危機
- 2-2 1823年の第7回教書演説
- 2-3 米国の軍事介入の確認
- 2-4 介入の教例
- 2-5 領域国家、擬似国家

### 3 国際報道や論説の変化

- 3-1 ノーム・チョムスキー教授
- 3-2 ジェフリー・サックス教授
- 3-3 CEPR (Center for Economic and Policy Research)
- 3-4 アルフレッド・デ・サヤス氏(国連人権理事会の独立専門官)
- 3-5 国際的学者の署名運動
- 3-6 商業マスメディアの変化

### 4 論点の整理

- 4-1 米国の対ベネズエラ経済制裁は違法
- 4-2 ベネズエラの石油依存の構造は「経済失政」の範疇(カテゴリー)ではない
- 4-3 ビジネス環境は、世界銀行の国際比較指標では、悪い
- 4-4 ベネズエラを脱出した450万人の「難民および移住者」はどこにいるのか?
- 4-5 マス・メディアのレトリックに問題はないか
- 4-6 長期停電の原因は何か。
  - 4-6-1 インフラ投資不足説
  - 4-6-2 サイバー攻撃の可能性(一般論)

### 5 ベネズエラやブラジルの資源依存について:燃料補助金の問題

### 6 ふりかえって日本や米国のガバナンスはどうなのか

### 7 まとめ

### 注

### 参考文献

## 1 はじめに：現在のベネズエラは一般的にどう描かれているか

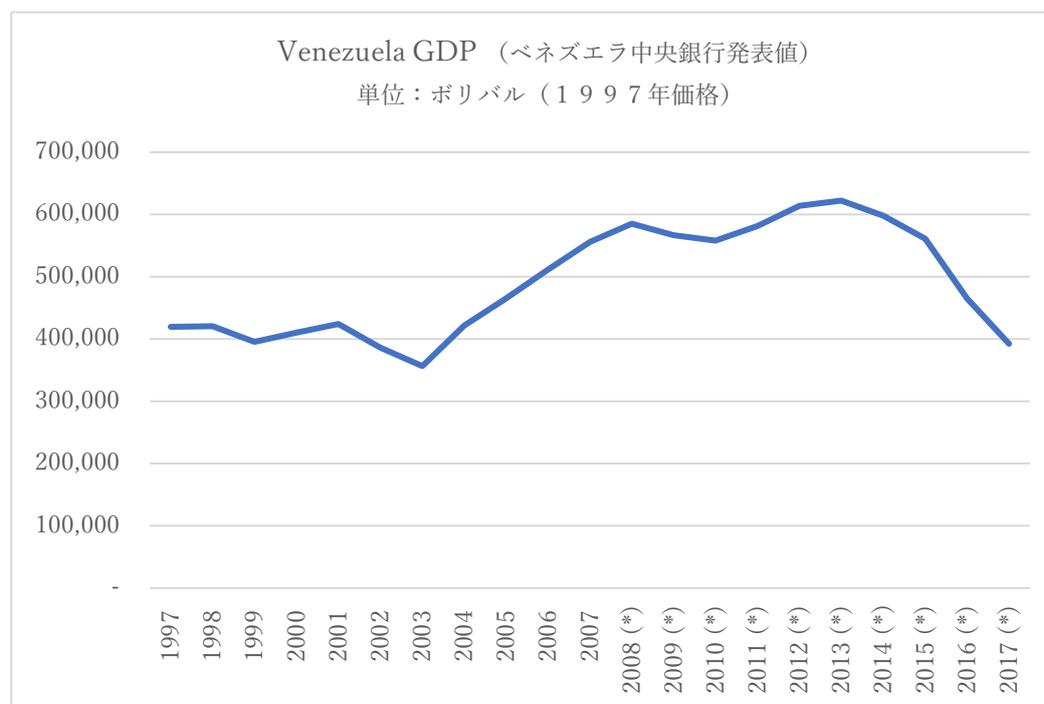
最初にベネズエラの危機について、一般的な報道内容や研究者による報告内容を確認しておきたい。経済面では、2014年からマイナス成長が続いている。以下の図は、世界銀行の Open Data というサイトに掲載されているエクセルのデータからつくったものである。ただし2015年からのデータは掲載されていない。経済の悪化(成長率の鈍化、つまり拡大は継続)は2012年から始まっているが、マイナス成長(経済の縮小)になったのは2014年で、この年から石油価格の下落が始まっていることが、図3からわかる。図3は、WTI原油価格の推移を示している。WTIは、West Texas Intermediate の略で、米国の西テキサスの高品質の原油(硫黄分が少ない)を指している。原油価格の指標としては、ほかに北海ブレント(英国産原油、欧州市場の指標)とドバイの指標がある。

つまり2014年から原油価格が下落しはじめ、ベネズエラ経済は縮小し始めた。縮小は現在にいたる5年間、継続しており、劇的で、GDPはほぼ半減したとも言われている。

この点、ベネズエラ中央銀行発表の数値では、以下の図の通りである。

また、実質の変化率は次の表のように発表されている。( )内はマイナスの意味なので、2014年以後を複利で乗じていくと、0.507093(約50.71%)になる。計算上半減である。

図1 ベネズエラGDPの推移



出所) ベネズエラ中央銀行 (URLは、以下：

<http://www.bcv.org.ve/estadisticas/producto-interno-bruto>)

表1 ベネズエラの GDP 変化率の推移 単位：%

1998	0.3	2008 (*)	5.3
1999	(6.0)	2009 (*)	(3.2)
2000	3.7	2010 (*)	(1.5)
2001	3.4	2011 (*)	4.2
2002	(8.9)	2012 (*)	5.6
2003	(7.8)	2013 (*)	1.3
2004	18.3	2014 (*)	(3.9)
2005	10.3	2015 (*)	(6.2)
2006	9.9	2016 (*)	(17.0)
2007	8.8	2017 (*)	(15.7)
		2018 (*)	(19.6)

出所：ベネズエラ中央銀行。URLは以下：

<http://www.bcv.org.ve/estadisticas/producto-interno-bruto>)

米国による経済制裁は、オバマ大統領が2014年12月に制裁法(14年ベネズエラの人権及び市民社会擁護法)に署名してからだ。そして制裁が本格化したのはトランプ政権が始まった2017年なので、経済制裁が原因で危機がはじまったのではなく、世界経済の影響で危機がはじまったのだとの説明が、一般的のようである。このように石油価格下落の悪影響を顕著に受けってしまうような、石油に高度に依存した経済構造をつくったチャベス政権とマドゥロ政権に、この危機をまねいた責任があるとされている。彼等の「経済失政」が招いた危機だと、一般的には報道されている。

図2 ベネズエラのGDP成長率の推移

出所) World Bank Open Data の Excel 表より作成



図3 世界の石油価格の推移 (WT I)



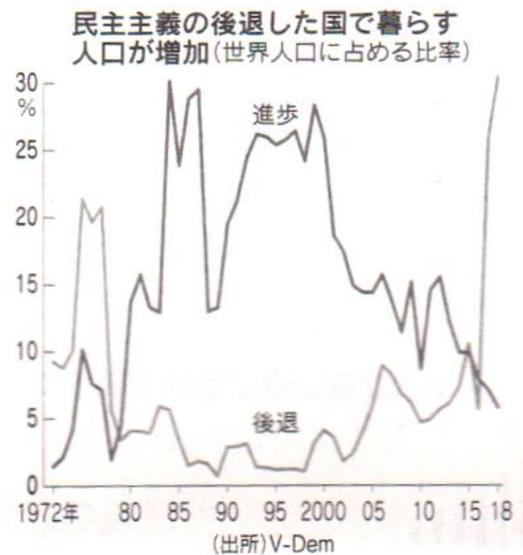
出所) Markets Insider のウェブサイトより 2019年 11月 5日に複写  
 (<https://markets.businessinsider.com/commodities/oil-price?type=wti>)。

## 2 「モンロー・ドクトリン」について

### 2-1 民主主義の世界的危機

ベネズエラの民主主義が後退していると批判されるが、そもそもラテン・アメリカ全体や、さらに全世界の民主主義が、日本をふくめて、岐路に立っている。日本資本主義と市民社会を長年研究されてきた山田鋭夫教授は、近著で、資本主義は民主主義と離婚しつつあるという趣旨の警告を発しておられる(山田・植村ほか 2018)。11月10日(2019年)の『日本経済新聞』日曜版の一面の囲み記事(「ベルリンの壁崩壊30年(中)一揺らぐ自由・民主主義」)において、民主主義の後退が世界にひろがっているという米国フリーダムハウスの見解を紹介し、民主主義が後退した国でくらす人口が増加していると論じて、次のグラフ(図4)を掲載している(注1)。すると、われわれ地域研究者にと

図4 民主主義の世界的後退



っては、民主主義の後退について、その地域別特徴はなにかが、重要な問いとなる。日本の特徴、ラテン・アメリカの特徴、北米の特徴などが問題になるが、ラテン・アメリカの特徴としては、各国の歴史的背景とともに、近隣の覇権国である米国の存在が無視できない。そこで米国の19世紀の外交政策の原則であったモンロー・ドクトリンから考察しよう。

## 2-2 1823年の第7回教書演説

モンロー・ドクトリンは、1823年12月2日に、James Monroe 第5代米国大統領が議会への第7回教書演説で述べた外交政策の原則である。この年次教書自体は本文 50 段落から構成されていて長いが、そのなかの3段落分が外交政策に充てられており、それが「モンロー・ドクトリン」と呼ばれている。一般には米国外交の「孤立主義」として学ぶ場合がおおく、また欧州と米州の間の「相互不干渉主義」としても紹介される。

最初に一般的な理解を辞典で確認しておこう。*Encyclopedia Britannica* によれば、この教義は、旧世界と新世界は異なる体制であって、異なる地域 (sphere) としてみなされるべきだという内容で、原文では南北アメリカは「西半球」(Western Hemisphere) として言及されている。当時はまだ「ラテンアメリカ」という言葉はなかったためである(注2)。同百科事典によれば、この「第7演説」では、4つの原則がうたわれた。第1に米国は欧州諸国の国内問題や諸国間の戦争には介入しない。第2に米国は西半球の植民地や従属国に介入しない。第3に西半球はこれ以上どこかの国の植民地にはならない。第4に欧州の国による西半球のどの国への抑圧や制御も、米国に対する敵対行為とみなす、である(出所 URL: <https://www.britannica.com/event/Monroe-Doctrine>)。演説原文での順番は、このとおりではない。

当時ラテン・アメリカではスペインやポルトガルの植民地が独立をはじめていたので(ペルー1821年、ブラジル22年、メキシコ21年など)、それに直面した神聖同盟諸国が影響力を再度強めようとした(英国は独立を支持)。その欧州の動きを牽制する必要があった。またロシア帝国が現在のオレゴン州のあたり(北西海岸地方)の領有を主張していたので、それに対応する必要もあった。主にこれら2つの状況を背景に、モンロー教書が発表された。欧州とアメリカ大陸の「相互不干渉」の原則であるが、その後は、セオドア・ルーズベルト大統領の拡大的な解釈(1904年の年次教書/Roosevelt Corollary to the Monroe Doctrine)を経て、米国によるラテンアメリカ支配の確立と同義のような性格をもつ教義となった。本年(2019年)5月にマイアミにて、前国家安全保障担当大統領補佐官ジョン・ボルトン氏(その後9月に解任)が、「モンロー主義は生きており、健康な状態だ」(Monroe Doctrine is alive and well)と発言した。一般には、第二次世界大戦後、米国は国連の安全保障理事会の理事国になったことでモンロー主義は終焉したともいえるようだが、ボルトン補佐官(当時)は「まだ生きている」と強調した。

## 2-3 米国の軍事介入の確認

米国の戦後冷戦期とその後のグローバル経済時代の行動は、モンロー主義との距離も重要かもしれないが、よりひろい(つまり侵出の対象がラテンアメリカに限らない)覇権主義の観点から理解されるべきではないか。私は、米国の全世界的規模での覇権主義的行動については、モンロー主義と関連づける必要はないと考える。

戦後も米国は、軍事介入を世界中で繰り返してきた(ただし旧ソ連や現在のロシアの軍事介入も多い)。たとえば元世銀のエコノミストで、その後NY大学で教鞭をとり、市場経済分析の業績が評価されて2013年のアダム・スミス賞を受賞したW. イースタリー教授は、著書 *White Man's Burden* (2006年)の中で、米国の戦後の軍事介入の例を多数挙げて批判している。アダム・スミス自身、『国富論』で東インド会社によるインドの軍事支配を厳しく批判し、米国の独立(『国富論』刊行と同年)を支持していた。イースタリー教授は、植民地支配をラディカルに非難したA.スミスの精神を継承しているといえる。

表2 1945年から2004年までの米国の他国への介入、軍事侵略、その他介入の歴史

年	対象国	内 容
2004	Haiti	Marines land. CIA-backed forces overthrow President Jean-
2003-present	Iraq	Occupation force of 150,000 troops in protracted counter-insurgency war
2003	Iraq	Invasion with large ground, air and naval forces ousts government of Saddam Hussein and establishes new government.
2001	Afghanistan	Air attacks and ground operations oust Taliban government and install a new regime.
2001	Macedonia	NATO troops shift and partially disarm Albanian rebels.
1999	Yugoslavia	Major involvement in NATO air strikes.
1998	Iraq	Four days of intensive air and missile strikes.
1998	Afghanistan	Attack on targets in the country.
1998	Sudan	Air strikes destroy country's major pharmaceutical plant.
1997	Liberia	Troops deployed.
1996-1997	Zaire (Congo)	Marines involved in operations in eastern region of the country.
1995	Croatia	Krajina Serb airfields attacked.
1994-1996	Haiti	Troops depose military rulers and restore President Jean-Bertrand Aristide to office.
1993-1995	Bosnia	Active military involvement with air and ground forces.
1992-1994	Yugoslavia	Major role in NATO blockade of Serbia and Montenegro.
1992-1994	Somalia	Special operations forces intervene.
1991	Haiti	CIA-backed military coup ousts President Jean-Bertrand Aristide.
1991-2003	Iraq	Control of Iraqi airspace in north and south of the country with periodic attacks on air and ground targets.
1990-1991	Iraq	Major military operation, including naval blockade, air strikes; large number of troops attack Iraqi forces in occupied Kuwait.
1990	Liberia	Troops deployed.
1989-1990	Panama	27,000 troops as well as naval and air power used to overthrow government of President Noriega.
1989	Philippines	CIA and Special Forces involved in counterinsurgency.
1989	Libya	Naval aircraft shoot down two Libyan jets over Gulf of Sidra.
1987-1988	Iran	Naval forces block Iranian shipping. Civilian airliner shot down by missile cruiser.
1986	Bolivia	Special Forces units engage in counter-insurgency.
1986	Libya	US aircraft bomb the cities of Tripoli and Benghazi, including direct strikes at the official residence of President Muamar al Qadaffi.
1984	Iran	Two Iranian jets shot down over the Persian Gulf.
1983-1989	Honduras	Large program of military assistance aimed at conflict in Nicaragua.
1983	Grenada	Military forces invade Grenada.
1982-1984	Lebanon	Marines land and naval forces fire on local combatants.
1981-1990	Nicaragua	CIA directs exile "Contra" operations. US air units drop sea mines in harbors.
1981-1992	El Salvador	CIA and special forces begin a long counterinsurgency campaign.
1981	Libya	Naval jets shoot down two Libyan jets in maneuvers over the Mediterranean.
1980	Iran	Special operations units land in Iranian desert. Helicopter malfunction leads to aborting of planned raid.

1976-1992	Angola	Military and CIA operations.
1975	Cambodia	Marines land, engage in combat with government forces.
1973	Chile	CIA-backed military coup ousts government of President Salvador Allende. Gen. Augusto Pinochet comes to power.
1971-1973	Laos	Invasion by US and South Vietnamese forces.
1970	Oman	Counter-insurgency operation, including coordination with Iranian marine invasion.
1969-1975	Cambodia	CIA supports military coup against Prince Sihanouk, bringing Lon Nol to power. Intensive bombing for seven years along border with Vietnam.
1966-1967	Guatemala	Extensive counter-insurgency operation.
1966	Ghana	CIA-backed military coup ousts President Kwame Nkrumah.
1965-1973	Laos	Bombing campaign begin, lasting eight years.
1965	Dominican Republic	23,000 troops land.
1965	Congo	CIA backed military coup overthrows President Joseph Kasavubu and brings Joseph Mobutu to power.
1965	Indonesia	CIA-backed army coup overthrows President Sukarno and brings Gen. Suharto to power.
1965-1975	Vietnam	Large commitment of military forces, including air, naval and ground units numbering up to 500,000+ troops. Full-scale war, lasting for ten years.
1964	Brazil	CIA-backed military coup overthrows the government of Joao Goulart and Gen. Castello Branco takes power.
1964	Panama	Clashes between US forces in Canal Zone and local citizens.
1963	Ecuador	CIA backs military overthrow of President Jose Maria Valesco Ibarra.
1962	Laos	CIA-backed military coup.
1962	Cuba	Nuclear threat and naval blockade.
1961	Cuba	CIA-backed Bay of Pigs invasion.
1960-1964	Vietnam	Gradual introduction of military advisors and special forces.
1960	Congo	CIA-backed overthrow and assassination of Prime Minister Patrice Lumumba.
1959	Haiti	Marines land.
1958	Panama	Clashes between US forces in Canal Zone and local citizens.
1958	Lebanon	US marines and army units totaling 14,000 land.
1954	Guatemala	CIA overthrows the government of President Jacobo Arbenz Guzman.
1954	Vietnam	Financial and materiel support for colonial French military operations, leads eventually to direct US military involvement.
1953	Iran	CIA overthrows government of Prime Minister Mohammed Mossadegh.
1950-1953	Korea	Major forces engaged in war in Korean peninsula.
1948-1954	Philippines	Commando operations, "secret" CIA war.
1948	Italy	Heavy CIA involvement in national elections.
1947-1949	Greece	US forces wage a 3-year counterinsurgency campaign.
1946-1949	China	Major US army presence of about 100,000 troops, fighting, training and advising local combatants.

1946	Iran	Troops deployed in northern province.
------	------	---------------------------------------

出所) Global Policy Forum より複写 (URL は以下 : <https://www.globalpolicy.org/us-westward-expansion/26024-us-interventions.html>)。

表3 表1のラテンアメリカを対象とした事例の抜粋

年	対象国	年	対象国	年	対象国
2004	Haiti	1981-1992	El Salvador	1963	Ecuador
1994-1996	Haiti	1983	Grenada	1962	Cuba
1991	Haiti	1973	Chile	1961	Cuba
1989-1990	Panama	1966-1967	Guatemala	1959	Haiti
1986	Bolivia	1965	Dominican Republic	1958	Panama
1983-1989	Honduras	1964	Brazil	1954	Guatemala
1981-1990	Nicaragua	1964	Panama		

出所) 表2より抜粋。

#### 2-4 介入の数例

本稿はブラジル、ニカラグア、ベネズエラの3国を検討対象にする。ブラジルについては、1964年3月31日に、ブラジルのジョアン・ゴラル（João Goulart、ブラジル労働党〔PTB〕出身の大統領）の政権を転覆するために、あらゆる手段を用いるべきだ、というリンドン・ジョンソン（Lyndon Johnson）大統領の発言テープが開示されており、聞くことができる。

この音源は、National Security Archive という団体のウェブサイトに掲載されている (<https://nsarchive2.gwu.edu/NSAEBB/NSAEBB118/index.htm#audio>)。ゴラル大統領はウルグアイへ亡命し、その後カステロ・ブランコによる軍事クーデターが成功して、64年に軍政が始まったわけだが、それから40年たった2004年に、米国は国家安全保障資料館に所蔵されている秘密文書を開示しはじめた。それによってゴラル政権転覆についての米国（ケネディ政権およびジョンソン政権）の執拗な介入が明らかになり、ブラジル国民は衝撃を受けた。開示情報にもとづいた映画『21年間続いた1日』(O Dia que Durou 21 Anos)が制作されている。より詳しくは、鈴木茂教授の記事を参照されたい (<https://nipobrasil.org/archives/4948/>)。

2013年頃からブラジルで労働者党政権に抗議するデモが突然増え始めたが、これについて、米国の介入を疑う声も現地取材で耳にした。しかし筆者は証拠を得ていないので、米国の関与を肯定しない。しかし完全な否定ができる研究段階でもないと思われる。将来米国が国家安全保障関連の情報を開示したとき、米国の介入による左派政権転覆の「もう1つの例」として、米国の介入史のリストに付け加わるかもしれない。ブラジルについては、以下を参照→山崎 (2019) および近田 (2019)。

ニカラグアについては、サンディニスタ民族解放戦線 (FSLN) による政権が1979年に成立したが（本年が40周年）、直後から米国による介入がはじまった。すなわち米国は反革命政府の傭兵軍「コントラ」（ニカラグア国民も含まれる）を支援し、内戦状態をつくりだした。また太平洋側の港湾に米国は機雷を敷設して、ニカラグア政府の戦力に打撃を

与えた。90年の選挙でFSLNは敗退し、保守政権が続いたが、2006年にFSLNが選挙で勝利して、07年1月からFSLN政権が復活した。ダニエル・オルテガ大統領は憲法をかえて無期再選を可能としたので、現在3期目である。昨年(2018年)4月にオルテガ政権への抗議運動がはじまり、それがエスカレートして多数の死者がでる社会騒擾になった。これについて米国の介入があったどうかは、証拠はないが、長い介入の歴史にかんがみると、完全な否定もできないと思われる。

ベネズエラについては、チャベス政権成立(1999年)直後から、米国は「多方面」戦略という非軍事的方法による介入を展開しつづけ、ベネズエラの政権転覆を追求してきた。「多方面戦略」とは、メディアを通じたプロパガンダ攻撃、為政者に対する「独裁者」「安全保障上の脅威」といったレッテル貼りによる印象操作、CIAの支援による街頭デモや抗議行動による社会の不安定化、国内ビジネスエリートによる買い占めなどの経済ボイコットの組織化などである。詳しくは所康弘の論文を参照されたい(所 2019)。「多方面」戦略をエビデンスで証明することは不可能に近いが、現時点では筆者の判断では、「状況証拠」は多い。「多方面戦略」を活用した米国によるベネズエラ経済つぶしという見方を、完全に否定することはできないのではないか。

## 2-5 領域国家、擬似国家

こうした覇権国の介入を受けやすい状況について、稲田十一がアフリカについて論じた「領域国家」「擬似国家」の考え方をラテンアメリカに適用できるかどうかという論点が浮上する。稲田教授は、アフリカの多くの国は、宗主国によって人工的にひかれた国境で囲まれた国家となっており、国家と民族が一致していないし、独立国としての歴史がまだ浅い(70年弱という国が多い)(稲田 2009)。総合的にみて国民国家とはいえない状況だという。ブラジル、ベネズエラ、ニカラグアについても、独立した国家といえない状況は認められるが、賛否両論がありえよう。

擬似国家である→覇権国の介入が頻繁だ、国民統合(とくに先住民)が不十分だ、人口にしめる最近の移民が多い(例:ベネズエラの約3200万人のうち近年の移民が数百万人)、など。

独立国家である→たとえば日本は米国への政治的従属度合いが高く、完全な独立状態ではない(とくに沖縄についてはそのようにいえる)。現代世界において「100%の独立性が認められないと、独立国家ではない」とすると、日本は独立国家ではないことになるが、これは奇妙なのであって、日本は独立国家である。ブラジル、ベネズエラ、ニカラグアについて、対米従属性があるとしても、他方で執拗な介入に抵抗し続けていたり、米国とは異なる政策(反新自由主義の政策)を追求するなどの点は、独立国の性質を表している。

## 3 国際報道や論説の変化

### 3-1 ノーム・チョムスキー教授

1980年代、私は大阪外大で学部生として言語学を勉強していたが、当時の世界の言語学はチョムスキー理論(変形生成文法: transformational generative grammar)一色で塗りつぶされていたような印象を—これは私の錯覚かもしれないが一抱いている。偉大な言語学者であって、言語学を専攻する学生には、スーパースターの1人だった。むろん、ソーシャル、金田一京助、金田一春彦、英語学の金山崇など、スーパースターはほかにもいた

が、チョムスキーの存在は大きかった。その後マス・メディア論でも論陣を張られてきた。

Pacific Standard というサイトの記事（著者は Thor Benson, 2019年3月14日付）によれば、チョムスキー教授は、ベネズエラ経済を危機に追い込んだのは、社会主義ではなく、汚職・腐敗であると論じている。ベネズエラを社会主義と規定して批判することは、間違いだと主張されている。また米国についても、バニー・サンダース大統領選挙候補の主張内容は、社会主義的というよりも、アイゼンハワー大統領の時代には当たり前の福祉政策にすぎないという趣旨で、擁護している。世界全体が右傾化したので、昔の福祉政策が、現在は社会主義だとレッテルをはられて攻撃されているが、この特徴付けは間違いだと、批判している。記事のURLは以下：<https://psmag.com/ideas/corruption-not-socialism-brought-down-venezuela>

3-2 ジェフリー・サックス教授（コロンビア大学、国連MDGs、SDGsの支援者）

教授は、Democracy Now という動画サイトで、米国によるベネズエラへの経済制裁は、Elliott Abrams と John Bolton が設計したもので、pure bullying（純粋なイジメ）だと糾弾されている（Youtubeのサイト：<https://youtu.be/m4spncQg3Fw>）。

3-3 CEPR（Center for Economic and Policy Research）：2人のノーベル経済学賞授賞者が顧問をしている経済研究所

2019年4月に、Mark Weisbrot and Jeffrey Sachs の共著で、米国による対ベネズエラ経済制裁の違法性を糾弾する報告書をCEPRの公式刊行物として刊行している。とくに2017年8月以降の経済制裁（8月25日の大統領命令NO13808号）の影響がおおきい。しかしさらに米国への石油の輸出を禁じた2019年1月28日の措置は、よりおおきな打撃となったと、警告を発している。このとき、すなわち1月28日には制裁と同時に、ファン・グアイド氏を暫定大統領として認めたが、このことの間接影響が、経済制裁の影響に重複したと、主張している。総合的な経済的打撃の結果、2019年のGDPは37.4%の減少だという予測を出している。

これらの制裁により、2017年～18年の間に4万人が死亡したと、推計している。経済制裁は米国が批准した国際条約に抵触すると、批判している。

報告書は以下から無償でダウンロード可能である→<http://cepr.net/publications/reports/economic-sanctions-as-collective-punishment-the-case-of-venezuela>

CEPRの顧問は以下の通り（Advisory Board of Economists）

- Richard Freeman, Professor of Economics at Harvard University
- Janet Gornick, Professor at the CUNY Graduate Center and Director of the Luxembourg Income Study
- Robert Solow, Nobel Laureate economist
- Joseph Stiglitz, Nobel Laureate economist

3-4 アルフレッド・デ・サヤス氏（国連人権理事会の独立専門官）

彼の経歴は、国連人権委員会のウェブサイトに掲載されている。一部省略したが、抜粋した。かなりしっかりした経歴を有する国際的研究者、専門家といえよう。その彼が、ベネズエラのマドゥロ政権を糾弾する、彼自身が所属する国連人権委員会の報告書を批判している。その批判の文章は以下のとおり：

「The historic visit of Michelle Bachelet to Venezuela had potential, but the report, written by the same secretariat that did the reports of Zeid, is fundamentally flawed and disappointing.」（仮訳 by 山崎：M.バチェレのベネズエラへの歴史的訪問は潜在的な可能性を有していたが、ザイド報告の作成にかかわった同じ事務局によって書かれたその報告書は、基本的に欠陥があり、がっかりする内容である）

出所：彼自身のブログ：<https://dezayasalfred.wordpress.com/2019/07/05/un-report-on-venezuela/>

経歴：Mr. Alfred-Maurice de Zayas

Alfred de Zayas, Independent Expert on the promotion of a democratic and equitable international order Alfred-Maurice de Zayas studied history and law at Harvard, where he obtained his J.D. He practiced corporate law with the New York law firm Simpson Thacher and Bartlett and is a retired member of the New York and Florida Bar. He obtained a doctorate in history for the University of Göttingen in Germany.

Mr. de Zayas has been visiting professor of law at numerous universities including the University of British Columbia in Canada, the Graduate Institute of the University of Geneva, the DePaul University Law School (Chicago), the Human Rights Institute at the Irish National University (Galway) and the University of Trier (Germany). At present he teaches international law at the Geneva School of Diplomacy.

He has received several awards, most recently the "Educators Award 2011" of Canadians for Genocide Education.

### 3-5 国際的学者の署名運動

Open Democracy というサイトで、70名をこえる学者、専門家が、米国トランプ政権によるベネズエラへの介入を批判し、署名者のトップはノーム・チョムスキー教授である。サイトのURLは以下のとおり。

<https://www.opendemocracy.net/en/democraciaabierta/open-letter-by-over-70-scholars-and-experts-condemns-us-backed-coup-a/>

### 3-6 商業マスメディアの変化

—Forbes 誌（オンライン版）

Kalev Leetaru の投稿記事が2019年3月9日に発表されている。タイトルは、「Could Venezuela's Power Outage Really Be A Cyber Attack?」で、これは今年（2019年）3月はじめにベネズエラで生じた長期間の大停電（3月7日17時頃から始まった）について、「原因は本当にサイバー攻撃なのか？」と疑うタイトルである（注：大停電は記事がでた後の3月下旬にもう1度発生し、その後も発生している）。タイトルはそうなのだが、よく読むと、むしろ著者はサイバー攻撃による停電の可能性をなかば示唆しているかにも、読める。文章としては、「インフラ投資不足が原因だ」と明確に書いているが、サイバー攻撃で停電をしかけることが可能な時代であり、国民世論を反政権に誘導する格好の手段であって、米国もサイバー攻撃による停電に備えるべきだと、警告を発しているのである。著者は、おおまかにまとめると、次のような趣旨の説明を展開している。米国で停電が生じた場合、米国の電力インフラも老朽化しており、仮にサイバー攻撃での停電だとしても、それをインフラの維持管理不足や老朽化による停電だといって市民や利用者を騙すことが容易な状況があるという。

出所のURLは以下→

<https://www.forbes.com/sites/kalevleetaru/2019/03/09/could-venezuelas-power-outage-really-be-a-cyber-attack/#6156f87b607c>

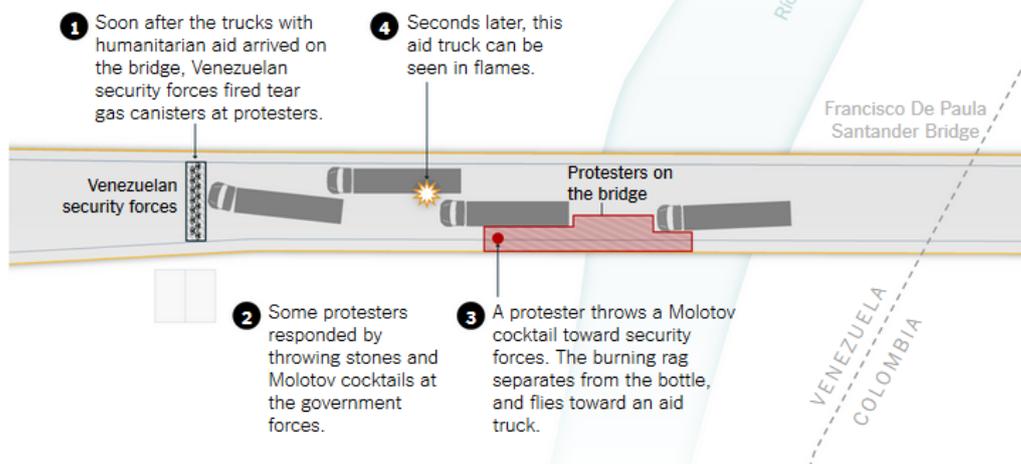
—New York Times 紙

米国からの救援物資（医薬品または医療関係の供給品）をコロンビア国境からベネズエラへ搬入することについて、ベネズエラ政府は反政府抗議運動への武器が含まれているとみて、受け入れを拒否していたが、その点は「国際的人道支援の拒否」として、国際的に批判された。この文脈において、搬入につかわれたトラックが放火で燃えるという事件が、2019年2月23日に発生した。場所は、コロンビアのククタ（Cúcuta）という、ベネズエラとの国境の町である。すでにベネズエラ側にはいった橋の上で事件は生じた。これについては、ベネズエラ政府の仕業であるという国際的非難がマドゥロ政権に集中した。しかし3月10日付の New York Times の記事（Nicholas Casey, Christoph Koettl and Deborah Acosta の署名記事）は、火をつけたのはマドゥロ政権に抗議する側の人間だと、新しい見方を示した。抗議する人が投げつけた火炎瓶が、「事故で（accidentally）」、トラックの炎上に導いたという見方を掲載した。

この記事には多様な読者の声が寄せられている。中には、記事の主張の根拠の1つであるビデオはフェイクであるとか、トランプ政権を批判したい New York Times 紙の思惑による意図的な記事だといった意見もある。

### What Happened at the Bridge

On Feb. 23, four aid trucks arrived in Cúcuta, Colombia, at the border with Venezuela. The demonstrations soon turned violent, and some of the aid burned in the clashes. Here's how the situation unfolded.



By The New York Times

出所) New York Times オンライン版の記事

(<https://www.nytimes.com/2019/03/10/world/americas/venezuela-aid-fire-video.html>)

—クーリエ・ジャポン

2019年10月21日の北澤豊雄氏の記事「ベネズエラは本当に破綻寸前なのか？—現地を見た人々の暮らし」（連載 ベネズエラ危機は今 第1回）によれば（オンライン記事）、クラップ（CLAP）という国営のスーパー（クラップというのは政府による食料分

配制度)では、「食糧も薬もあらゆる日用品が揃っていた。ただし車のタイヤは最近まで手に入らなかったと男性店員が教えてくれた。…」と報告している。

#### 4 論点の整理

この間の流れを、「腐敗を許さぬ市民による悪い政府 (bad government) への抗議とその打倒」とみるならば、それは歓迎すべき市民社会の動きといえるであろう。しかしそうではないかもしれない。論点を整理していきたい。

##### 4-1 米国の対ベネズエラ経済制裁は違法

対ベネズエラ経済制裁は、報告末に添付した通りである。これは米国議会の Congressional Research Service の *In Focus* という文書で、2019年10月16日付である。

これらは以下の法律や条約に違反するのではないだろうか。

- ① 国連憲章第7章 (国連安全保障理事会のみが、制裁を課す主体)
- ② 1970年10月24日国連総会決議2625

「国際連合憲章に従った国家間の友好関係及び協力についての国際法の原則に関する宣言 (友好関係原則宣言) Declaration on Principles of International Law concerning Friendly Relations and Co-operation among States in accordance with the Charter of the United Nations

- ③ ジュネーヴ条約の「第四条約」第33条 (集団的罰則の禁止)
- ④ 米州機構憲章第4章第19条・第20条 (他国への介入の禁止)

Article 19 : No State or group of States has the right to intervene, directly or indirectly, for any reason whatever, in the internal or external affairs of any other State. The foregoing principle prohibits not only armed force but also any other form of interference or attempted threat against the personality of the State or against its political, economic, and cultural elements.

Article 20 : No State may use or encourage the use of coercive measures of an economic or political character in order to force the sovereign will of another State and obtain from it advantages of any kind. (下線部強調は、引用者である山崎圭一)

- ⑤ 国連人権規約 (社会権規約、自由権規約) など。

##### 4-2 ベネズエラの石油依存の構造は「経済失政」の範疇 (カテゴリー) ではない

産業構造の多様化はすべての途上国の悲願といえる。マドゥロ政権も多様化を模索していた。同時にいえることは、昨今多様化に成功した途上国は皆無か、例外的と思われる。グローバリゼーションのなかで、グローバル・ヴァリュー・チェーンに途上国の企業はくみこまれており、自由度を失っている面がある。多様化のためには技術革新が必要で、そのためには研究者が必要のはずだが、途上国は圧倒的に研究者が少ない。政権の意志とは別に、グローバル経済や途上国社会の脆弱性という厳しい現実が、途上国の産業の多様化を容易に許さない。このため、国民所得の格差も、縮小が遅いか、または拡大している。

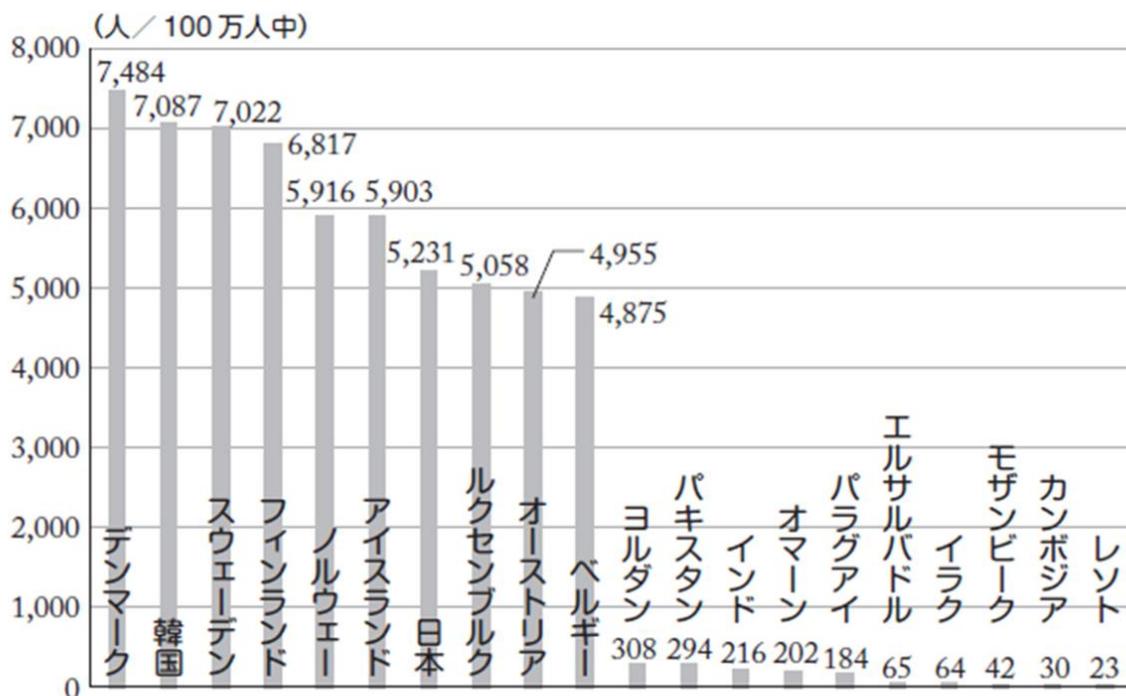
ブラジルも資源依存型で、産業の多様化は不十分である。

ベネズエラの産業の多様化の失敗を「経済失政」とよぶなら、全世界の多くの国々が経済失政の例ではないか？日本も、経済同友会の前代表幹事だった小林喜光氏 (三菱ケミカルホールディングス取締役会長) によれば、過去30年間世界的なヒット商品は生み出せ

ておらず、「失われた30年」であった。日本も新しい産業または商品を生み出せていないという点で、経済失政の状態である。

ベネズエラもブラジルもニカラグアも、「他の途上国並み」の不十分性なのか、突出して不十分なのか。

**Figure 図 10-3 R&D (研究開発) に従事する研究者数の南北格差 (2015 年)**



(注) 2015 年についてデータのある国 61 カ国を抽出して、値の大きい順に並べ替えたリストから、上位と下位の 10 カ国を表示。

(出所) 世界銀行オープン・データより筆者作成 (<https://data.worldbank.org/indicator/SP.POP.SCIE.RD.P6?view=chart>)。

出所) 山崎圭一「(第 10 章) 途上国の経済と社会」(横浜国立大学経済学部テキスト・プロジェクトチーム編『ゼロからはじめる経済入門』有斐閣所収) より複写。

**Table** 表 10-3 新興国の 1 人当たり GNI (PPP 換算) の対アメリカ比率  
の変化 (1990~2017 年)

(単位：%, 倍)

国 名		1990	2000	2010	2017	変化率
対比較	アメリカ	100.0	100.0	100.0	100.0	—
	中国	4.2	7.9	19.0	27.8	6.6
成長傾向の国	ベトナム	3.7	5.8	8.5	10.7	2.9
	インド	4.7	5.3	8.7	11.7	2.5
	バングラデシュ	3.6	3.6	5.3	6.7	1.9
	韓国	34.8	48.6	62.2	63.6	1.8
	トルコ	25.5	25.6	35.4	45.8	1.8
	インドネシア	12.0	11.6	16.4	19.8	1.7
	フィリピン	10.7	10.6	13.5	16.7	1.6
	ナイジェリア	7.5	5.3	9.8	9.4	1.3
	停滞傾向の国	ロシア	33.7	18.0	40.6	41.3
コロンビア		19.5	17.4	21.0	23.5	1.2
エジプト		15.7	16.0	19.4	18.9	1.2
メキシコ		24.6	27.6	30.5	29.5	1.2
アルゼンチン		28.2	31.1	36.2	33.7	1.2
イラン		31.1	28.2	36.0	34.9	1.1
パキスタン		8.7	7.4	8.9	9.7	1.1
ブラジル		27.4	23.3	28.3	25.2	0.9
南アフリカ		25.5	20.0	23.3	21.7	0.9

(出所) 世界銀行オープン・データの情報より筆者作成。

出所) 山崎圭一「(第 10 章) 途上国の経済と社会」(横浜国立大学経済学部テキスト・プロジェクトチーム編『ゼロからはじめる経済入門』有斐閣所収) より複写。

#### 4-3 ビジネス環境は、世界銀行の国際比較指標では、悪い

筆者自身は、民主主義の「通信簿」があるとすれば、多く国は成績を下げていると理解している。またブラジルの汚職・腐敗はすさまじい(ただしマイクロなレベルの改善例も蓄積されており、徐々に透明性を増していることも事実)。

世界銀行の Ease of Doing Business Ranking の 2019 年版で確認しておこう。

日本	39位 (実はそれほど高くない)	75.65点
ブラジル	109位	60.01点
ニカラグア	132位	55.64点
ベネズエラ	188位	30.61点
合計	190ヶ国	

出所の URL: [https://www.doingbusiness.org/content/dam/doingBusiness/media/Annual-Reports/English/DB2019-report\\_web-version.pdf](https://www.doingbusiness.org/content/dam/doingBusiness/media/Annual-Reports/English/DB2019-report_web-version.pdf)

しかし日本についても、悪い数値は豊富にある。公的債務残高は GDP の 200% で、世界最大である。自殺者は年間 2 万 5 千人から 3 万 5 千人の水準が 30 年間続いている。民主主義についても、たとえば国際 NGO 「国境なき記者団」による「報道の自由度ランキング」は 2019 年について 67 位 (世界 180 ヶ国・地域中) である。程度や態様の差異はあるにせよ、ニカラグアやベネズエラだけでなく、世界的に多くの国で、冒頭紹介したように、民主主義は衰退しつつある。

#### 4-4 ベネズエラを脱出した 450 万人の「難民および移住者」はどこにいるのか？

UNHCR (国連難民高等弁務官事務所) の公式ウェブサイトによると、「ベネズエラ難民」は以下のとおり。全世界で 450 万人の「難民および移住者」が発生し、そのうち政治亡命の希望者 (asylum seekers) が全世界で 650,000 人。約 200 万人が米州内で政治亡命以外の形で合法的に滞在中のようである。この状況について UNHCR は、1 億 5820 万米ドルの対応予算を申請中 (情報源の URL : <https://www.unhcr.org/venezuela-emergency.html> / 上の数値は 2019 年 11 月 12 日 23 時 11 分現在)。疑問点は以下の通り。

- ① ベネズエラは 1960 年の人口が 800 万人強で、そこから現在の 3200 万人まで急増したが、最近の移民もおおひ (数百万単位)。その人々が「里帰り」した、または母国に戻っているという現象がかなり含まれている可能性はないか。
- ② 国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) は、難民キャンプ等の現場で数えた数値を積み上げて 450 万人と述べているのではないようだ。「難民」の定義自体は、厳格にあり、以下のとおりである : ”Refugees include individuals recognised under the 1951 Convention relating to the Status of Refugees; its 1967 Protocol; the 1969 OAU Convention Governing the Specific Aspects of Refugee Problems in Africa; those recognised in accordance with the UNHCR Statute; individuals granted complementary forms of protection; or those enjoying temporary protection. Since 2007, the refugee population also includes people in a refugee-like situation.”

(引用元の URL : <http://popstats.unhcr.org/en/overview>)

- ③ 国連難民高等弁務官事務所は、たしかに 450 万人を前提とした支援計画を策定していて、大部の計画書がウェブサイトでダウンロード可能となっているが、現時点では計画書であり、実施後の報告書はでていない。

\* 当該計画書 *Regional Response Plan for Refugees and Migrants from Venezuela* の URL: <https://data2.unhcr.org/es/documents/details/67282>

- ④ 難民キャンプがあまり多くはみあたらない。現在ブラジルのロライマ州内のボア・ヴィスタ (Boa Vista) とパカライマ (Pacaraima) に 13 の臨時シェルターが開設され、6000 人以上を受け入れたようである。またコロンビアのマイカオ (Maicao)

に temporary reception center を開設し（2019年3月）、350人を受け入れたようである。しかし450万人と比較すると、わずかの数値である。

たしかに「難民キャンプに居住しない難民」も多く発生することは、シリア難民のケースをみると、事実のようだ。今回のベネズエラ難民の場合も、難民キャンプに居住しない難民も多数おられる可能性はあるが、450万人の内訳（難民と移住者）の情報がない。450万人という数値は、正確なのか？

- ⑤ ブラジル政府は、たしかにベネズエラ人を多数受け入れているが、難民認定は非常に少ない。以下、最近書いた論考から、抜粋、複写した。

ブラジルには世界から、2011～18年の間に約20万7000人の難民申請があり、とくに18年は約8万人の申請があった。そのうち同年は777人を難民として新規に認定した。多い順に、シリア、パレスチナ、コンゴ民主共和国、キューバ、パキスタン、アフガニスタン、アンゴラ、ブルンジ、モロッコ、ナイジェリア、ベネズエラ（5人）などである。

他方移民としての受け入れがあり、2011年から18年の間で、その数は77万4200人以上である。このうち1年以上の滞在者（長期移住）は49万2700人である。出身国として多いのは、2010～18年の合計で、ハイチ、ボリビア、ベネズエラ、コロンビア、アルゼンチン、中国、ポルトガル、ペルーである。18年に限定すればベネズエラが39%と最大で、次がハイチである。このように、「人道的危機」の状態だと騒がれているベネズエラについては、意外にも難民認定はわずかで、移民としての受け入れが多い。

出所) 山崎圭一（2020）「ブラジルのボルソナロ政権と社会の様相」『経済』1月号、46頁。

参考までに、世界的な難民および移住者の状況は、以下の表4のとおりである。

表4 世界の難民・移住者の状況

難民が発生している地域・国	人数、状況、移動（移住）先
中央アフリカ共和国	約100万人がカメルーン、コンゴ民主共和国、チャド、コンゴ共和国へ出国
中央アメリカ地域とくにエルサルバドル、グアテマラ、ホンジュラス	NTCA諸国（注1）から2016年月までに137,000人が避難。ホンジュラス国内の避難民（IDPs）が174,000人。2016年前半に、米国およびメキシコから退去を命じられたNTCA諸国の出身者は99,522人。マラス（maras）とよばれる犯罪組織による暴力が原因。5年間で出国者は10倍に。殺人発生率が最高記録になっている—たとえば2016年で、エルサルバドルの殺人発生率は10万人当たり91.2人で、世界一である（注2）。
全世界（欧州に向かう流れ）	2015年から140万人が、船や小舟（dinghies）で、ギリシャ、イタリア、スペイン経由、ヨーロッパを目指した。
イラク	2014年以来300万人が国内で避難民となり、24万人がトルコ、レバノン、ヨルダンおよびドイツを含む外国で難民となった。
南スーダン	2013年12月以後330万人が家を離れた。190万人は国内で避難、220万人近隣国へ難民として脱出した。
シリア	シリア国民の半分以上にあたる1300万人（2018年末の数値）がdisplaceされた。500万人がレバノン、トルコ、ヨルダンその他へ脱出した。レバノンには100万人以上の難民が住んでいる。公式の難民キャンプはなく、7割が貧困ライン以下の生活。ヨルダンでは66万人が暮らしているが、8割はキャンプ外。14万人がZa'atariキャンプとAzraqキャンプで暮らしている。93%が貧困ライン以下の生活。
ロヒンギャ難民（ミャンマー）	2018年4月時点で、推定約67万1000人のロヒンギャの人々（子ども、女性、男性）が2017年8月25日以来、ミャンマーを出てバングラデシュへと避難した。
ウクライナ	2年半続いている紛争のため、100万人がdisplaceされ、そのうち6万6000人が障害者である。30万人が周辺国に亡命を求めている。
イエメン	200万人が国内で避難民となっている。人道的支援が必要な状況にある人は2000万人である。

注1：NTCAは、Northern Triangle of Central Americaの略で、日本語ではたとえば「中米北部三カ国」と呼ばれる。エルサルバドル、グアテマラ、ホンジュラスを指している。

注2：中川正紀「内戦終了後のエルサルバドルからの対米移民の継続的流入とその原因—暴力から逃れて来る移民たち」（『フェリス女学院大学文学部紀要』第53号、2018年3月所収）の138頁の情報より。原資料はPew Research Centerの報告書。

出所）情報源のURLは以下：<https://www.unrefugees.org/refugee-facts/statistics/>。NTCA諸国については、UNHCRの以下のNTCA諸国についてのウェブサイトより（URLは、以下：<http://reporting.unhcr.org/sites/default/files/NTCA%20Situation%20-%20December%202016%20REV.pdf>）。

#### 4-5 マス・メディアのレトリックに問題はないか

独裁と弾圧という用語が頻繁にでてくるが、いずれも意味の範囲が広く、定義があいまいなまま使われている。筆者の理解では、独裁は政権の性質や状況を表現し、弾圧はそのための手段で、いずれも幅がある。後者の弾圧については、選挙法の改悪による野党の参加の制限もあれば、デモなどの武力制圧まで、一定のスペクトラムがある。いくつかの弾圧が組み合わせられてつかわれたり、政権の時期によって使用される弾圧の手段、形態が異なる。その弾圧の組み合わせによって、独裁の状況（政策決定における異論排除の程度）も変化するといえる。

社会騒擾の中で、治安部隊が出動し、そのなかで死者がでた場合、最終的には現場検証をおこなって、発砲者から犠牲者までのライフルの弾の弾道を確定する必要がある。発砲者が政権側である場合、調査が困難であることは、理解できる。いずれにせよ、マスメディアの報道は、現場検証がなく、以下のパターンが多い。「独裁政権といわれる〇〇国で、社会騒擾があり、治安部隊が出動して、一部暴徒と化した市民を弾圧した。この中で死者は〇〇名にのぼった。」死者が誰で、誰に撃たれたかは不明でも、印象としては、政権側が暗殺したかに読める。

#### 4-6 長期停電の原因は何か。

##### 4-6-1 インフラ投資不足説

日本では、『朝日新聞』が添付したような報道をしている。5点指摘したい。第1に、最初の傍線部（山崎加筆）にあるように、停電原因については、ナバロ氏が「聞いた話」である。これでは、「又聞き之又聞き」である。第2に、傍線部の2番目だが、ラテンアメリカでは一般的に軍人はテクノクラートを兼ねていて、とくにインフラ管理の専門知識を有する人が多いと思われる。軍人がダメだというコメントは、奇異に感じた。第3に、日本をふくめて首都以外を軽視する傾向はどの政府にもあるが、とはいえ一般的には地方をある程度ケアするのは統治の基本だ。どのように「地方を犠牲」にしているのか、具体的情報が必要である。第4に、この記事はあくまでナバロ元大臣の見解紹介だ。記者による調査の結果ではない。見解紹介の記事は、両論を併記するのが普通のスタイルではないか。第5に、仮にこの記事の通りだとすると、投資不足はナバロ大臣（当時）にも責任があるという話にならないか。

##### 4-6-2 サイバー攻撃の可能性（一般論）

サイバー攻撃の可能性は、否定するほうが、むしろ奇妙だ。

日本ではすでに、電力の送電線を用いたデジタル情報の送信が実用化にむけて研究されている。東北電力の以下のウェブサイトにも、次の情報が掲載されている。「これまで、送電線を使用したデジタル伝送については、伝送時にデジタル信号間の干渉が著しいことや、雷等の外来雑音の影響を受けやすいことなどから、十分な伝送品質の確保が困難となっていました。このたびの開発においては、送電線路の雑音対策など各種デジタル信号処理技術を開発・適用したことにより、所要の回線品質を実現したものです。」

（出所：<http://www.tohoku-epco.co.jp/whats/news/2004/50317a1.htm>）

日経XTECHのサイトでは、「狙われるニッポン 先端技術で守れ 発電所や鉄道も危ない、サイバー攻撃を受けやすくなった理由」（2018/04/19 05:00 付）という記事が掲載されている（<https://tech.nikkeibp.co.jp/atcl/nxt/column/18/00233/00012/>）。そこでは、次のように説

明されている。「従来、社会インフラの制御ネットワークの仕様は事業者ごとに独自であり、非公開とされていた。また、インターネットのような外部ネットワークとは接続しないようにしていた。(改行) このため、一般的なパソコンに感染するウイルスを使ったサイバー攻撃の影響は受けないとされていた。ところが近年では、制御システムの利便性の向上と引き換えに、サイバー攻撃を受ける危険性が高まっている。(改行) その理由の一つが、制御システムの仕様のオープン化である。汎用的な製品や OS、標準プロトコルを採用するケースが増えている。このため、一般企業で利用している Windows に感染するウイルスの影響を、制御システムも受けるようになってきている。前述の社会インフラを狙った攻撃で使われたとされる、SQL Slammer (スラマー) や Blaster (ブラスター) などのウイルスは、いずれも Windows に感染するウイルスである。」このあと、近年の攻撃例として、次の表を掲載している。

時期	内容	使われたウイルスの名称例
2003年1月	米国の原子力発電所の制御システムがウイルスに感染。制御システムが約5時間にわたって停止した	SQL Slammer
2003年8月	米国東部の鉄道会社の信号管理システムがウイルスに感染。周辺の3路線で列車の運行停止やダイヤ乱れが発生した	Blaster
2010年6月	イランのウラン濃縮工場のシステムにウイルスを感染させ、遠心分離機に異常な回転をさせて破壊した	Stuxnet
2011年9月	三菱重工業がウイルス感染の被害を受け、社内システムに関する情報が流出した	Derusbiなど複数
2013年3月	韓国の主要放送局や金融機関において、ウイルスによって社内システムがダウン。銀行のATMの一部が使用できなくなった	DarkSeoul
2015年5月	日本年金機構がウイルス感染により約125万件の年金情報を流出させた	Emdivi
2015年12月	ウクライナにおいて、ウイルスにより変電所のブレーカーが切断され、数万世帯が最大6時間にわたり停電した	BlackEnergy
2016年12月	ウクライナにおいて、ウイルスにより変電所のブレーカーが切断され、数万世帯が1時間15分停電した	Industroyer
2017年8月	中東の石油会社の制御システムが緊急停止させられた	Hatman

*New York Times* 紙は、トランプ政権がロシアの電力配電網 (grid) にサイバー攻撃をしていることを、次のように報じている。「WASHINGTON — The United States is stepping up digital incursions into Russia's electric power grid in a warning to President Vladimir V. Putin and a demonstration of how the Trump administration is using new authorities to deploy cybertools more aggressively, current and former government officials said.」 By David E. Sanger and Nicole Perlroth (June 15, 2019 付記事)

(<https://www.nytimes.com/2019/06/15/us/politics/trump-cyber-russia-grid.html>)

*Forbes* 紙は、米国政府が送電システムをサイバー攻撃から守るための方策を採るために、急に動き始めていると、報じている。その記事の内容によると、もともとインターネット

に接続することが念頭になくつくられた施設がおおく、それが近年ネット接続されるようになった。しかし攻撃を想定していないので、脆弱だというのだ。記事は、Kate O'Flaherty (Senior Contributor) によって書かれ、Jul 3, 2019, 09:51am にサイトに掲載されている。タイトルは、「U.S. Government Makes Surprise Move To Secure Power Grid From Cyberattacks」で、その中に、こうした動きの動機が次のように説明されている。「So, what is motivating SEIA? Power grids are a major target for foreign actors. One infamous example of an attack on similar critical infrastructure is the Stuxnet worm which was discovered 10 years ago after it ravaged an Iranian nuclear facility. The result of the cyber-assault was a toolkit designed to specifically target the supervisory control and data acquisition (SCADA) systems that power critical infrastructure.」記事のURLは以下のとおり：

<https://www.forbes.com/sites/kateoflahertyuk/2019/07/03/u-s-government-makes-surprise-move-to-secure-power-grid-from-cyber-attacks/#33560d7c3191>

##### 5 ベネズエラやブラジルの資源依存について：燃料補助金の問題

ベネズエラの経済失政の1例として、石油依存があり、具体的には燃料補助金の問題があるといえよう。たしかにガソリン代が無償に近いほど廉価だというのは、燃料補助金制度としては劣悪だといえる。それを擁護する余地は一切ない。

しかし、現在おおくの途上国で燃料補助金が運営されており、政権によっても問題だと認識されている。マドゥロ政権も燃料補助金を問題として認識しているが、廃止できていない。どの途上国も、問題だとわかっているにもかかわらず、廃止できない状況にある。あるいは廃止と復活を繰り返しているのである。

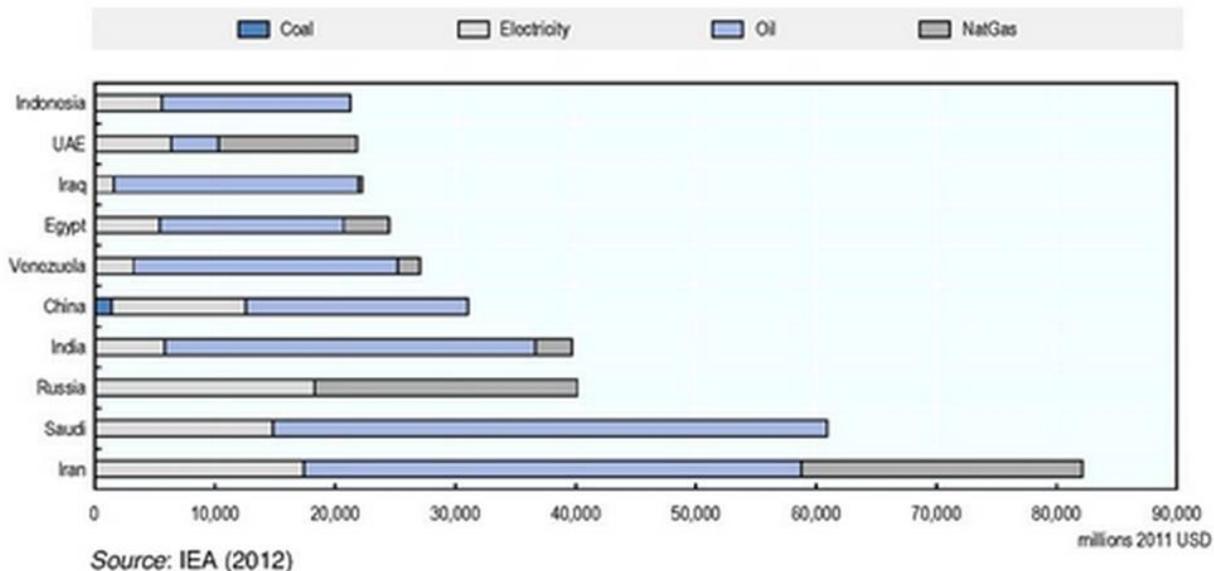
燃料補助金を福祉政策の1つとしてつかってしまう背景には、グローバル経済時代になり、資本移動が自由な環境下では福祉国家を建設しにくいという状況がある。先進国は、20世紀中葉に、資本移動を制限して低金利を可能とした状態で、いわば「さっさと、急ごしらえで」福祉国家を構築した。「急ごしらえ」だったので細部に問題があるが、とにかく、「福祉国家」を造り上げた。途上国はこれからというときに、グローバル化で資本移動が自由となり、低金利政策は困難になった。福祉国家建設に必要な財政赤字も難しい時代になった。そこで、福祉政策の選択肢がきわめて制限的な環境下におかれている。このマクロ経済の文脈において、資源国については燃料補助金といういわば「麻薬」に手を出してしまうのである。

現在途上国の福祉政策の研究において、燃料補助金とその廃止の失敗過程は、研究の支柱の1つになりつつある。

以下の図5と図6は、OECDの報告書 (Durand-Lasserre et. al. 2015) からの複写であるが、ベネズエラだけでなく、おおくの国で燃料補助金制度が導入されている。

図5 燃料補助金を導入している諸国のトップ10 (単位: 2011年 百万米国

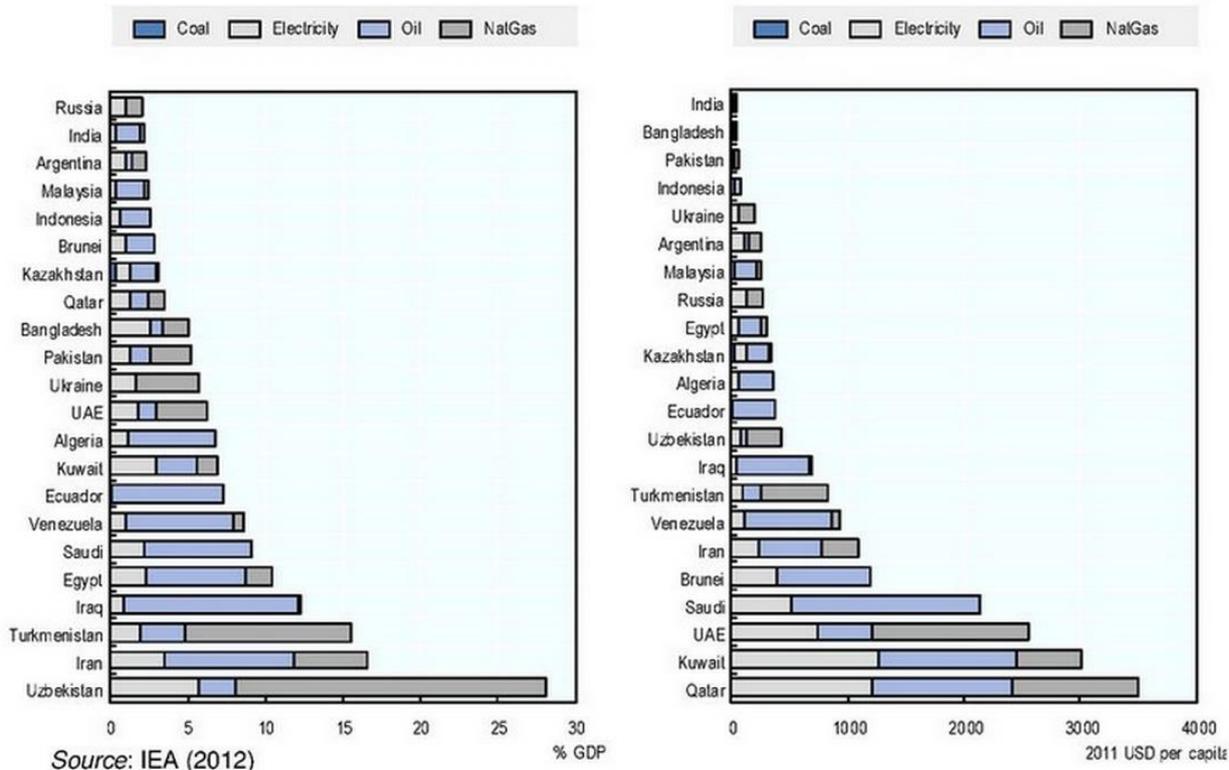
Figure 1. Top 10 countries for energy consumption subsidies in 2011



ドル)

図6 燃料消費への補助金の国際比較

Figure 2. Energy consumption subsidies per capita and as share of GDP in 2011 in selected countries



## 6 ふりかえって日本や米国のガバナンスはどうか

しかし先進国は、国際指標でみるほどに、ガバナンスがよいと自慢できるだろうか？

- ①ベネズエラの燃料補助金はひどいが、日本の原発関連の補助金は効率的であろうか。「電源三法」での莫大な交付金こそ「ばらまき」である。
- ②日本は2020年東京オリンピックのマラソンと競歩の会場の問題では混乱をもたらした（IOCや、放映権にかかわって米国企業の思惑もあるとされている）。札幌開催となったが、マラソンはオリンピックの象徴であり、それが開催されない東京開催を「東京オリンピック」とはいえないように思われる。「アスリート・ファースト」の観点が最優先されるべき点に、異存はない。
- ③北陸新幹線は高額な新幹線120車両（10編成分）を台風19号による水害から守れず、現在廃車にむけて作業が進められている（ただし新幹線は、大水害から新幹線車両を無事待避させた経験が過去に数度ある）。危機管理の失敗（経験伝承の不十分性）のケースではないのか。
- ④東京電力は2011年3月には福島原発を爆発させてしまった。想定外の高い津波による自然災害だと東京電力は裁判（ふるさとを喪失した住民による民事損害賠償の集団訴訟、28件あり）で主張してきたが、各地ででた裁判判決のなかには、東電の予見可能性をみとめた判決が多い。3人の被告への強制起訴（検察審査会）による刑事訴訟（業務上過失致死傷罪）では、予見可能性の有無が焦点の1つとなっていたところ、「予見可能性」は2019年9月19日の東京地裁判決で否定され、3人の被告は無罪という判決がでた。そもそも津波で非常用電源を喪失したとされているが、地震そのものによる電源喪失の可能性を無視してよいのかと、ドイツの高校生が心配している。情報は十分に開示されていない。
- ⑤公的債務残高は世界一の規模で、GDPの2倍ある。
- ⑥法制度についても、憲法に完全に不整合な集団的安保法制をつくり、『日本国憲法』第10章第98条の最高法規規定を事実上無効にしている。沖縄の辺野古基地の建設問題では、イデオロギーの左右をとわぬ「オール沖縄」の意向（数々の地方選挙や住民投票で繰り返し表明された意志）を無視しているので、『憲法』第8章第92条をないがしろにしている。憲法の根幹的な条項を無視する日本に、他国の大統領を独裁者とよぶ資格があるかどうか、疑問である。
- ⑦日本は毎年2.5万人～3.5万人が自殺している国で、過去30年間で約90万人に達する。2018年の自殺者数は3万人近いが、約5000人は、経済・生活問題と勤務問題が動機だと、厚生労働省は集計している（厚労省サイト：<https://www.mhlw.go.jp/content/H30kakutei-01.pdf>）。
- ⑧米国については、2008年のサブプライム危機をつくり、世界経済を混乱に落とし入れたことは記憶に新しい。

先進国のバッド・ガバナンスの例も、途上国同様、枚挙にいとまがない。先進国（あるいはOECD諸国）に途上国を見下す資格があるとは思えないが、ベネズエラやニカラグアをめぐる国際社会の否定的態度の根底には、基本的に、この「見下し」の発想があるとはいえないだろうか。

## 7 まとめ

- ① ブラジル、ベネズエラ、ニカラグアと、いずれもガバナンスやその他評価は、悪く、筆者はおおむね異論はないが、左派政権が労働者階級の政治参加や民主主義を追求していた点も注目すべきである。その民主主義も、0か1ではなく、幅の広いスペクト

ラムのなかで、程度の問題がある。ベネズエラもニカラグアも労働者党政権時のブラジルも、いままで政治から排除されてきた階級の声が政治に反映されるようになった点で、民主主義は進展した。現在そのある部分が衰退しつつある点は、事実である。しかし民主主義の衰退については、ベネズエラやニカラグアだけではなく、世界的傾向である。むしろ日本も例外ではない。

- ② 米国の介入主義が執拗に継続している。とくに「多方面戦略」による政権転覆作戦が遂行されているとみるべき状況証拠が、少なくない。ベネズエラの経済危機については、米国の経済制裁が主因とみる見方がでている。対米従属を考慮にいったとき、ラテン・アメリカに独立した国民国家が形成されているか否かについて疑う余地が少しあり、筆者は「独立国家」だという見方に傾いているが、両論併記しておいてよい状況かもしれない。
- ③ 全体に、ここ数年のブラジル、ベネズエラ、ニカラグアの政治・社会情勢については、100%のエビデンスがあるとは思われない評価や情報が混在していると感じられる。とくに「市民vs独裁（または腐敗）政権」という構図に、完全なエヴィデンスがあるとは思われない。「右派vs労働者階級の政権」という構図ないし「右派vs左派の民主主義」の構図も、検討されるべきである。

## 注

1 このグラフの出所のV-Demとは、スウェーデンのUniversity of GothenburgのDepartment of Political Scienceでの、Variety of Democracy研究を指している。これは世界各国の民主主義の水準を測定するプロジェクトである。このプロジェクトを遂行するのが、Staffan I. Lindberg教授が2014年に設立したV-Dem Instituteである。同研究所のウェブサイトは以下の通り：<https://www.v-dem.net/en/>。

2 19世紀初頭の段階では、まだ「ラテンアメリカ」という表現はなく、使用され始めたのは1850年代であった。当時「ラテンアメリカ」を使用し始めた人物の1人はナポレオン3世で、1860年代である。メキシコにフランスが介入した「メキシコ出兵／マクシミリアン問題／フランス干渉戦争」の経緯の中での使用であった。

## 参考文献

- IACHR [Inter-American Commission on Human Rights] (2018), *Country Report Nicaragua: Gross Human Rights Violations in the Context of Social Protests in Nicaragua*, OAS [Organization of American States]
- 稲田十一編(2009)『開発と平和—脆弱国家支援戦略』有斐閣
- 上谷直克(2019)「脆弱化するラテンアメリカ民主政治」『ラテンアメリカ・レポート』Vol. 35, No.2
- 河合恒生(2019)「ベネズエラ報道をめぐって」(『アジア・アフリカ研究』第59巻第3号(通巻433号)、7月刊所収)
- 近田亮平(2019)「転換しつつあるブラジルの社会福祉 —右派・保守イデオロギー色の強いボルソナロ政権—」『ラテンアメリカ・レポート』アジア経済研究所、36巻1号([https://doi.org/10.24765/latinamericareport.36.1\\_24](https://doi.org/10.24765/latinamericareport.36.1_24))
- 後藤政子(2019)「米国のラテンアメリカ政策とベネズエラ問題」(『アジア・アフリカ研究』第59巻第3号(通巻433号)、7月刊所収)

- 新藤通弘(2012)「ニカラグア大統領選挙」『経済』2月号(No.197)
- 鈴木頌著、北海道アジアアフリカラテンアメリカ連帯委員会編(1986)『自由か、死か—ニカラグア』北海道アジアアフリカラテンアメリカ連帯委員会
- 田中高編著(2016)『ニカラグアを知るための55章』明石書店
- 所康弘(2019)「新自由主義を巡る攻防—ベネズエラ問題の構造」(『アジア・アフリカ研究』第59巻第3号(通巻433号)、7月刊所収)
- 山崎圭一(2019 a)「ボルソナロ政権誕生から約一年——ブラジル社会はいま」『世界』12月号
- ———(2019 b)「ニカラグア訪問記」(『研究と資料』特定非営利活動法人かながわ総合政策研究センター、10月号、No.216所収)
- ———(2019 c)「(巻頭言)形式をとるか、実質をとるか——中米ニカラグアの訪問をふまえて」(『研究と資料』特定非営利活動法人かながわ総合政策研究センター、8月号、No. 215所収)
- 山田鋭夫・植村博恭・原田裕治・藤田菜々子(共著)『市民社会と民主主義』(藤原書店、2018年)■

# 大停電 「施設の管理不足」

## ベネズエラ元電力相

南米ベネズエラのチャベス前政権で教育相や電力相を歴任したエクトル・ナバロ氏(69)が5月29日、朝日新聞の取材に応じた。3月に起きた大規模停電について、現政権の「米国のサイバー攻撃のせいだ」との説明を否定し、「施設の管理不足が原因だ」と述べた。マドゥロ大統領が権力を乱用しているとも批判した。

▼1面参照



ベネズエラのチャベス前政権で教育相や電力相を歴任したエクトル・ナバロ氏＝5月29日、カラカス、竹花徹朗撮影

## 「マドゥロ政権地方を犠牲に」

ナバロ氏は、チャベス前大統領のブレインとして、チャベス氏の提唱する「ポリバル革命」Ⅱを支援した。チャベス氏が1999年に大統領に就任して2013年に死去するまで、閣僚などを務めた。電気工学の博士号を持ち、大学で教えた経験もある。

3月の大規模停電は「草刈りを怠ったために高圧線の近くで山火事が起きるな

ど、複数の要因が重なったのが原因だ」と説明した。国营電力会社で勤務する教員ら、複数の職員から情報を得たという。

だが、国营電力会社の要職に就いている軍出身者には山火事対策の必要性が理解されていなかったという。ナバロ氏は「電気技師を医者として病院に送れば、患者の管理ができず死んでしまう。発電所も同じだ。知識のない軍人に管理はできない」と述べた。経済の危機的な状況については、「米国による経済制裁のはるか以前から生じている」と指摘。電力会社のみならず、石油生産や農業、金融機関などの部門でも、経営の知識や経験が少ない軍出身者が重要ポストに就いた結果、産業が壊滅したと説明した。「軍人を重用したのはチャベス氏が

### ポリバル革命

「21世紀の社会主義」を掲げたチャベス前大統領が提唱。米国や富裕層の支配からの脱出を訴え、石油資源の公正な分配を通じた貧困の克服や中南米の経済的自立をめざす。ポリバルとは、ベネズエラを独立に導いた英雄シモン・ポリバルのこと。

## 『朝日新聞』

府の根本的な変革だ」と訴えた。

マラカイボなどの地方都市で電気や水道が止まり、燃料も不足している一方、首都カラカスは比較的安定している。こうした状況については、「カラカスには大使館や赤十字、国連機関がある。国内が正常だと装うため、政権が首都以外の地域を犠牲にしている」と批判した。

チャベス前政権と同じ閣僚の一人だったマドゥロ氏に対する人物評は「何か問題が起きても真剣に向き合わず、はぐらかすことが多かった」。前政権では10年

ごろから閣僚会議が開かれなくなっており、マドゥロ氏などごく少数だけがチャベス氏と会うようになったと明かし、「その頃から退廃、つまりチャベス氏とは異なる場所での政治が始まったと思う」と振り返った。

ナバロ氏は「チャベス氏は物事を実行するために権力を行使したが、マドゥロ氏は権力維持のために権力を行使している」と述べ、「私は社会主義者で、革命は必要だと信じている。だが、マドゥロ氏が革命を、そしてチャベス氏を政治的に殺してしまった」と批判した。(カラカス＝岡田多)

注:傍線は引用者(山崎)による。